



Title	チリ南部の民間医療に見る異文化接触：ある白人系患者の証言(1)
Author(s)	千葉, 泉
Citation	Estudios Hispánicos. 2001, 25, p. 139-154
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93850
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

チリ南部の民間医療に見る異文化接触 —ある白人系患者の証言(1)—

千 葉 泉

1. 序

チリは、軍事政権期に導入された「新自由主義経済主義」を基盤とする「発展モデル」に沿い、近年国民総生産や輸出額などマクロ経済指標の面で「成功」を収めてきた。

だが一方、この新自由主義的経済政策が促進した外国資本の進出によって雇用可能性や生活資源、環境など様々な側面で打撃を受けた先住民たちは、こうした発展モデルに反対を唱え、先住民族の権利や土地の回復、生活圏の尊重などを掲げた闘争を活発に展開するに至っている。⁽¹⁾

ところで、こうした政治の表舞台に露呈している民族紛争とは裏腹に、民衆文化の深層部ではひっそりと白人系住民と先住民との間で交流が進行している。本稿は、「邪術」の治療に関する具体的な証言を通し、「近代化の優等生」チリにおける異民族間交流の一端を示唆することを主な目的としている。

2. 本稿の意図

チリ南部の第8地域から第10地域にかけての農村部には、チリ最大の先住民集団であるマプーチェの共同体が点在している。そしてこれらの共同体の多くには「マチ machi」と呼ばれるシャーマンが住んでいる。マチは、共同体の精神的リーダーとして、共同体を挙げて行われる祈願儀礼ギジャトゥンや、個人的な治療儀礼マチトゥンなどの場で重要な役割を果たしている。

ところで、民間医療師としてのマチがこんにち治療する患者の多くは、マプーチェが「ウインカ winka」とよぶ非先住民系(白人系)の人々である。そして、これらの患者がマチを訪れる主要な動機の一つは「邪術」による不調だが、その場合、彼らに邪術をかけた人物は先住民ではなく、同じ白人系の人物であると判断されることが多い。その意味において、現代のマチは「先住民の治療師」という伝統的な役割を超え、白人同士の間で実践される邪術の問題にも積極的に関与しているといえる。⁽²⁾

「邪術」の問題は、従来のマプーチェ文化研究の中で最も頻繁に扱われてきたテーマの一つである。だがこれらの研究の大半は、邪術を「マプーチェ社会内部」の問題とする「閉じた視点」から扱っている。⁽³⁾そして「マチ」の医療上の役割に関しても、これを「マプーチェ患者の治療師」と限定して分析する傾向が強い。⁽⁴⁾

一方、疾病概念や治療といった観点からの研究も、マチを含む現代のマプーチェに対するキリスト教や近代的疾病概念の浸透、すなわちマプーチェの伝統文化に対するヨーロッパ系文化の影響という方向での変容に焦点が置かれている。⁽⁵⁾

それに対し、「白人系患者の治療師」としてのマチの社会的機能や白人系住民に対するマプーチェ・シャーマニズムの影響といった逆方向での変容の問題、あるいは「白人系住民と先住民の基層文化における共通要素」という広い視点での「邪術」の問題に十分な注意が払われてきたとは思われない。⁽⁶⁾

本稿で挙げる事例は、このように、現代のマチが自らの技能を発揮しているにもかかわらず、従来の研究では十分に検討されて来なかった状況を浮き彫りにする典型的なケースである。すなわち患者の治療に当たったのはマチだが、邪術の当事者たる被害者の男性(患者)と加害者の女性の双方、すなわち邪術をかけられた人物も、この人物に邪術をかけることを発起した(とされる)人物もともに白人系住民であるからである。

たがこの事例は、それに加えてさらに二つの興味深い状況を内包している。

第一に、患者を治療した人物だけでなく、邪術を「実行」した人物も先住民のシャーマン(マチ)であると認識されていることである。つまり、この男性に邪術をかけようとした白人女性が直接邪術を行ったのではなく、ある第三者のマチに依頼してこれを実践してもらったというのである。⁽⁷⁾

要するに、邪術の「実践」および「治療」という、邪術世界の表裏をなす二つの専門技能の領域において、白人系住民がそれぞれ異なる先住民の技能者(マチ)に依存するという構図が成立しているのである。その意味において、非先住民同士の問題に先住民の人的要素が極めて複雑かつ積極的に関与した、あるいは、少なくとも治療を担当したマチと患者の間ではそのように認識されている事例だといえる。

そして第二に、マチの治療を受けることを患者に決心させた彼の妻の存在も特筆される。

邪術をかけられたのは第9地域ルマコ区の集落部に居住する(通常の)白人

系チリ人の男性であった。それに対し、この男性の妻はイタリア系移民3世の女性である。そして、当初自分の不調の原因が邪術にあるなどとは夢にも考えていなかった男性を、先住民シャーマンの治療を受けるよう説得したのは、他ならぬこのイタリア系の妻であった。

19世紀初頭にスペインから独立を果たしたイスマノアメリカ諸国が、強力に近代化を推進した時期があった。それは日本でいえばちょうど明治期にあたる19世紀後半から今世紀初頭にかけてのことである。当時ヨーロッパで流行していた「進化論」や「実証主義」などの影響で、「近代化と進歩」をもたらす人的要素として、イタリアやドイツを始めとするヨーロッパ諸国から積極的に移民が招聘されたのである。

チリ南部でも、「平定」⁽⁸⁾と呼ばれる軍事行動によって「野蛮の具現者」たる先住民マプーチェから広大な領土が「解放」され、チリ人移民者と並んで土地を譲渡されたこれらの「新ヨーロッパ系移民」が植民を行った。⁽⁹⁾

ところが、「近代化の推進者」であったはずのイタリア系移民たちは、植民後、現地のレベルでは「野蛮な」先住民たちと様々な形で交流を結んだ。後者が移民から農耕や手芸に関する技術などを修得する一方、イタリア系移民たちも新しい隣人となった先住民たちから様々な文化要素を吸収していった。邪術の知識に関する患者の妻の証言は、こうしたヨーロッパ系移民の文化変容の一端をも示唆している。

そして最後に、患者やその妻の疾病概念やマチに対する意識などの変化の過程が、彼ら自身の言葉で赤裸々に語られている点も本資料の特徴である。

患者の男性は、始めから不調の原因が「邪術」だと思ったわけでも、マチやその儀礼の効能を信用していたわけでもない。当然の事ながら、当初は合理的な原因に発する疾病だと考えて病院での治療に奔走し、多額の治療費も支払っているのである。

しかし、一向に状態の好転を見ないまま長期にわたる辛苦を経験したのち、当初は先住民シャーマンに依存することに抵抗を感じていたこの男性も、妻の説得でその治療を受けることに同意した。そして、マチによる診断や治療を実際に体験し、病状の回復を肌で感じて行くうちに、自らの疾病観や先住民シャーマンに関する認識を変容させていった。こうした変容の過程で、マチをその最も純粋な具現者とする「先住民の伝統文化」そのものに対する彼らの視線も、変わらざるを得なかったであろうと想像される。

以上から本証言は、従来のマプーチェ・シャーマニズム研究の中で軽視され

てきた側面に光を当て、現代チリの水面下でひそかに進行しつつある異文化間接触の一端を示唆する資料という意味で、一定の価値を有するものと考ええる。

3. 当事者のデータ

以下の証言は、1999年8月11日に、チリ第9地域ルマコ区の市街部に位置する元患者男性の自宅において、筆者とこの男性および彼の妻との間でスペイン語で行われた対話の大部分を邦語訳したものである。

本証言に登場する主要な人物は以下の5名で、そのうち(1)と(2)が証言者である。証言の内容に鑑み、この二人を含む全ての登場人物の名前は架空のイニシャルで表記してある。

(1) 邪術をかけられた人物A氏

ルマコ区で生まれ育った白人系チリ人の小農民。両親もルマコ出身の白人系住民。証言当時の年齢は35才。マチの邪術治療を受けたのは1991年。

(2) A氏の妻B

イタリア系3世の女性。ルマコ区内に位置し、イタリア系移民の子孫が多数居住するチャンコ地区出身。父親は小農民であった。幼少時、自宅地内で労働していたマプーチェたちから邪術に関する話をよく聞いていた。夫Aをマチの治療を受けるように説得したのはこの妻であった。

(3) A氏の治療を担当したマチC

ガルバリノ出身のマプーチェ女性。ルマコ区内のレニーコ・グランデ共同体に在住。

A氏に対する治療儀礼(マチトゥン)はCの自宅で実施された。

(4) 邪術を発起した女性D

以前A氏と不倫関係にあった白人系女性。恋愛上の恨みからA氏に邪術をかけることを思い立ち、先住民シャーマンEに邪術の実行を依頼したとされる。

(5) Aに対する邪術を実行した女性E

マプーチェ女性。疾病治療のみならず「邪術」も行うタイプのマチ。Dの依頼でA氏に対する邪術を実行したとされる。

なお、証言の内容そのものについては、一部を省略した(「中略」と表記)ことを除いて、一切手は加えていない。また、(筆)は筆者の発言であることを示している。

4. 証言

(1) A氏の自覚症状<1>と邪術発覚までの経緯

(筆) それでは質問なのですが、マチトゥキ⁽¹⁰⁾ (マチによる治療儀礼)に関するあなたの経験についてお聞きしたいのですが、あなたはどんな病気にかかっていた、それは大体何年頃のことでしたか。

(A) 大体8年前です。

その頃私はひどく体の調子が悪く、ひどい胃の痛みと脚の痛みとを感じていました。というのは、私がやられた「術」は脚に対する、「足跡」⁽¹¹⁾に対するものだったからです。(中略)

それで医者たちとは言えば、彼らにはそうした事はわかりません。私は病院の医者たちの治療を受けたのですが、何ら解決にはなりませんでした。

(筆) どの地域の医者ですか？

(A) テムコ⁽¹²⁾とトライゲン⁽¹³⁾の医者です。

それでその後、私は決心しました。妻が私に言ったのです、「マチに診てもらいましょうよ」とね。そう言われてあの人のところへ行ったのです。すると彼女、マチは事の次第を全て言い当てたのです。

(行く前) 私はほとんど信じていなかった。ほとんど信じてはいませんでした。それで彼女は私の衣類を、下着一点を診たのです。それで私に事の次第を全て告げたのです。

(筆) あなたが何も言わなかったのにですか？

(A) 私が何も言っていないのに、彼女は一つずつその祈祷…、何と言いますか、その「術」の中で、私に一つずつ言い当てていったのです。私がどんな症状だったのか、誰が私に邪術をかけたのか、どんな人物なのか、とにかくあらゆる事をね。

(筆) ほう、具体的にある人物の名前を挙げたのですか？

(A) 具体的にです。どこに住んでいるかとか、全てをね。

(筆) ああ、全てをね。その人の名前もですか。

(A) ええ、ええ。あらゆるすべての事を、詳細にね。

(筆) あなたはその説明で納得が行きましたか。

(A) はい。それで初めて私は信用したのです。「そうかも知れない」と言ってね。

(筆) あなたが何も言わなかったのにですね。

(A) 本当に、全く何もね。私は何も言っていないのにですよ。私は一切聴き手に回っていただけなんだから。(中略)

(筆) でも、スペイン語でその人物の名を挙げたのですね。

(A) スペイン語です。ええ、ええ。で、そんな風でした。それから私に事をしかけたのが誰か、そして誰が私に…、なぜならその人物は別の「メディカ」⁽¹⁴⁾に依頼したからです、その…。

(筆) ああ、つまり「(女性の)邪術師」ですか。

(A) はい。でも、その人物は他の「メディカ」に依頼して、それでその人物が私に事を運んだわけです。

(筆) しかし、その「邪術師」というのはマブーチェの「邪術師」か、それとも「チレーナ(白

人系女性)」⁽¹⁵⁾か、どっちだったのですか？

(A) 私が理解したところでは、その人物もマプーチェだということでした。

(筆) なるほど。でも、しかし、あなたに邪術をかけたかった人は「チレーナ」なんですね？

(A) 「チレーナ」です、はい。

(筆) 女性ですね？

(A) 女性です。

(筆) なるほど。動機は何だったのか覚えていますか。

(A) ええ、まあ何というか…。

(筆) ああ、そういった事ですか。

(A) そうです、そうです。

(筆) ああ。想像がつきます。ええ、ええ、ええ。

(A) というわけで、復讐のような、まあそんな事だったんです。

それでメディカ⁽¹⁶⁾、彼女は私に不調の原因を告げたのです。それにあらゆる事の次第をね。で、「術」の中で薬草類の名前や病因を挙げ始めました。それで、マチトゥン治療を受けなければならないと私に告げたのです。10日や15日もこのまま過ごしてはいけない、でないとあまりにも進行してしまうからと、その…。

(筆) 病気ですね。

(A) ええ。で、そういうわけですよ。で、一週間後くらい後で、もうすぐマチトゥンをやることに決めた。それで事が運ばれたというわけです。(中略)

というわけで…、それから彼女は私に言いました。わたしがあんたを治してあげるからと。で、神様のお陰で今では元気になっているわけですよ。

それで、祈祷をする中で彼女は薬の名前を挙げていったのです、全て薬草の名前をね。全てが自然の薬草です。あれこれの植物の枝とかあらゆるものをね。それで、とても希少な薬草があって、この土地にあることはあるがとても少ないんだと。(中略)

(2) 治療儀礼「マチトゥン」代金

(筆) それから、お金について言えば、つまり代金はいくらかかったのですか。

(A) その当時、マチトゥンの代金は大体4万ペソかかりました。マチトゥンだけでね。でも、診察料…、一回目の診察の費用は5千ペソでした。マチトゥンをやる前のことです。

(筆) で、その後で、何といいますか、瓶入りの薬草汁、これもまた別料金ですか。それともマチトゥン代に含まれていたのですか。

(A) いいえ、それもその後で別料金でした。

(筆) いくらですか。

(A) 別の薬草の処方代として5千ペソかかりました。

(筆) ということは、全部で約5万ペソ⁽¹⁷⁾ってところですか。

(A) 大体5万ペソです。でもその頃、つまり大体8年前のことです。

(筆) で、そうしたあらゆる経緯を経た今、あなたは高かったと思いますか、あるいは、どうでしょう…。

(A) いいえ。高かったとは思いません。だって、私が感じていた症状を思えば…。

(3) F氏の自覚症状<2>と邪術法

(筆) ひどかったのですか。

(A) ひどいものでした。というのは、大体10時か11時位に食欲が襲って来るのです、とてもとても激しい食欲がね。食事をしようと思って卓につくと、もう食欲はなくなっているのです。そんな感じで、私は見る見るうちに衰弱して行ったのです。

(筆) つまり、食べ物を見たときたんにはですか。

(A) ええ、食べ物を見たときたんになんて、それからどうしても食欲がわかない。食べることができないのです。つまり、そこに「術」が効いていたわけですよ。それから、歩きたいと思っても片足が痛むのです。何か、ここから上の方まで脚が裂かれるような痛みでした。それでこんな風に、ひどくびっこをひいて歩くしかなかったのです。いやあ、本当にもうどうしようもない状態でした。

(筆) でも、マチは告げたのですか、例えばどんな風に「事」を運んだのかとか。

(A) ええ、ええ。

(筆) その事について何か覚えていますか。

(A) 私がかけられた「術」ですか。「足跡」を使ったのです。(足の)跡を…。だから脚が痛んでいたのですよ。

(筆) つまり、「足跡」を使って何かをしたと、そういうことですか。

(A) はい。そこからそれを取り出して私に何かを仕掛けたのです。

(筆) その「足跡」を使ってですか。

(A) その「足跡」を使ってね。で、それで我慢できないほど脚が痛んでいたわけです。日に日に悪くなって行きました。

(筆) それで、医者たちは何と言っていたのですか。何も説明しなかったのですか。

(A) 全くね。リウマチ性の痛みかも知れないとか、ただ単に…。錠剤とか与えられたものは全て飲んでいましたがね。

(筆) でも快方には向かわなかったのですか。

(A) 全然。もちろん、少しは痛みを抑えてくれてはいました、でも…。

(筆) 医者にも、つまり、かなりのお金を使われたのですか。

(A) ええ、使いました。

(筆) 大体いくら位、大体のイメージをつかみたいのでお聞きするんですが。

(A) その後、私はテムコへ行ったのですが、テムコの病院の診察料は高いものでした、大体その頃のお金で約1万ペソ、8千ペソくらいです。

(筆) 診察だけでですか。

(A) 一回の診察だけです。それから検査を受けました。でも何も異常はなしと出たのです。正常だとね。医者に言わせると神経系統の問題だと。

(筆) で、その説明はあなたには…、どのように思われましたか。

(A) 確かに神経がやられていたかも、何故なら、ええ、自分が患っていた症状そのものに苛まれて、神経も…。ついには、神経だってやられてしまいますからね。それでもっと苦しみを感ずるようになっていたのです。(中略)

(4) 患者の先住民シャーマンに対する意識の変容

(筆)でも最初は、つまりマチに診てもらうことに少し抵抗を感じましたか。

(A)ええ。はい、というのは始め私は、つまりあまり信用していなかったからです。それで、妻の方が私に言ったのです、「行きましょよ」とね。それで診てもらいに行きました。で、神様のお陰です。それで、あの人が一部始終、私のその時の症状とかを言い当てて行ったのです。本当にその通りでした。

(筆)せっかくですので奥様にも質問させて下さい。あなたはご主人の病気に関して、なぜマチの治療を受けようと決心されたのですか。

(B)なぜって、それまでに優秀な専門家の先生のところで診てもらったのですけれど回復しなかったからです。全く異常(原因)が見つからなかったのよ。相変わらず同じ症状のままでした。ですから、それで私は…。で、ついに私は、これは医者で治せるような代物ではない、と確信したのです。⁽¹⁸⁾

(筆)つまり、言ってみれば「別物」だと。

(A)確かに「別物」だったんですよ。(中略)

(筆)で、そうしたことを経験した後で、あなたはいわばマチ、マチトゥンに対して抱いていた考えが変わりましたか。

(A)ええ。あのね、わたしは、ええと、あの人のことを疑っていたというわけではないんですけどね。でも、自分が邪術をかけられたなんて信じられなかったのです。でもそうではなかった。その通りだったんですよ。だって彼女は私の衣類を一点、上半身の下着を診た時にね、彼女は全ての事を言い当てて…、どんな状態か、どんな自覚症状か、まあとにかくあらゆる事柄全てをね。もうそれは、本当にまるで私が彼女にあらかじめ教えていたかのようにですよ。(奥さんに向かって)だろ。

(筆)あなたもその場にいたのですか。

(A)そう、彼女もそこにいたんですよ。

(筆)で、どう思われました。

(B)納得ですよ、なぜってここでこの人に起こっている事をあの人が知っているはずはありませんもの。

(A)もちろんだよ。

(B)だって誰もそのことを公にしていけないんです。彼女の言っている事が本当だったからこそなのです。

(5) 薬草処方過程における分業

(筆)一つお聞きしたいことが…、ええと具体的な事ですが。その、そのマチは、例えば治療している時に、いわば目は覆っていましたか。

(A)ええ。(中略)

(筆)両目を覆っていたと。

(B)覆っていました。全く、完全にね。⁽¹⁹⁾ (中略)

最初の(診察の)時に目を覆って…。それにクルトゥルン太鼓⁽²⁰⁾を抱えて…、なあ。

(筆)なるほど。

(A)で、それからね。

(筆) はい、はい、はい。

(A) で、彼女は自分の夫に伝えていた、そうだよな。

(筆) ああ、ご主人にですか。

(A) 「マチヨ」⁽²¹⁾にね。(中略)

それで彼女は、術を使って彼に伝えて行くのです。それで彼はまたもう一人別の人、あるマプーチェの若者に伝えて行くのですよ。

(B) 「チリ語」⁽²²⁾を知っている人によね。

(A) チリ語がわかって、それに…、彼らの言葉もね。それで、彼女、マチは術を使ってあっちの方に伝えて行く。で(中略)マチヨはすぐにそちらの方に、その…。

(筆) というのはマチヨはマプーチェ語しかわからなかったからだ。(中略)

(A) いえ、いえ。スペイン語も知っていました。でも書くことは、彼には出来なかったんです。それで別の者がこっちにもう一人…。

(B) もう一人のマプーチェの若者がね。

(A) 別のマプーチェの若者です。

(筆) ふむ…。ああ、読み書きができる者ですね。

(A, B) 読み書きができる者です。

(A) というわけで、彼らの言葉を理解して手早く書き取っていくわけですよ。(中略)

全てをその…、彼女が薬の名を挙げていって、何が、どれが私の病気を治療するために必要な薬草かっていうことをね。

(筆) ふむ…。

(A) それで、こんな風に一枚の紙に大体20…、約22種類位の薬を書いてね、大体ですけど。(中略)

(6) 下着による診断と「足跡」の「帰還」

(筆) ええとそれ以外に…、自分がかかっている病気を言い当てるために、彼女は下着を診たと言われましたね。でもそれ以外に、尿⁽²³⁾は診ませんでしたか。

(A) いえ、尿ではありません。彼女は尿は使いません、だよな。

(B) ええ。彼女は衣類を診るだけです、患者が使って汗を吸ったものをね。

(A) できれば一日それを着て、その衣類、例えば下着のシャツを身につけて汗をかくわけです。私はシャツを持って行って、それを使っただけです。彼女はそれを診て…。(中略)

(B) で、それであの人は、マチトゥン儀礼を受けなければならないと判断したのよ。それでこの人の場合、「ダブル・マチトゥン」⁽²⁴⁾を受けることになったのです。

(筆) ああ、じゃあ、あなたの魂が離脱しているとは言いませんでしたか、そういうことは言っていないですか。

(A) いえ、いえ、いえ。でもマチトゥンをやった後のことです。マチトゥンの後には確かにそうです。その時に、もしかしたら…。確かに「代物」が出てきました、覚えてるだろ。足跡のやつが出てきたんですよ。土がね。

(筆) ほう、土ですか。それはどういうことですか。

(B) この人が踏んで、それで踏んだところを取られたと、彼が足で踏んだところの土をね。あんたが言うところの「足跡」を取られたのよね。それを取られてしまったんです。

(A)というわけで、それが後でマチトゥンをしている最中にやって来るんです、彼らの「術」によってね。

(筆) やって来るところというのは…。

(A) 彼女の手中にですよ。マチのね。

(筆) ああ、マチのですか。つまり、言ってみれば戻って来ると。

(A) で、そうすると自分の症状は楽になるんです。

(筆) ああ、ということは、相手方の手中にある間は、つまり…。

(A) そうすると、痛みを感じるんですよ。

その後で、マチトゥンの最中に彼らの許に(土が)届くと、それ後で私は楽になりました。すぐによくなったのを感じました、脚が、全身がね。

(筆) でも、その彼女のところに足跡が戻ってくるというのは、要するに彼らがそう言ったということですか、つまり。

(A) いえ、いえ、いえ、ちゃんと見えたんです。戻ってきた時に土を見せられました。

(B) ひとかけらの土を見せてもらったんです。

(筆) で、それがあなたが、つまり奪われた足跡だったと。

(A) ええ、ええ、ええ、私が奪われたものですよ、ええ。

(7) 邪術の発起人は白人女性、実行犯は先住民シャーマン

(筆) あなたも同じ考えですか、その人が…。ええと、邪術をかけようと思っている人物がいますよね。でもその人は直接邪術をかけることができるのではなくて、つまり、別の人物に依頼すると…、で、その依頼される人物はマプーチェですか、それともチレーナですか、あなたの考えでは。

(B) この人に事を運んだ女のことですか。

(筆) ええ。

(B) そうしようとしたのはチレーナで、マチのところに依頼に行ったんですよ。⁽⁷⁾

(A) 別のマチのところへね、マプーチェの。

(筆) でもマチだったんですか。「マチだ」と言っていましたか。

(A) その者もマチだったんです。

(筆) ということは、やはりマチの中にも邪術をやるものがある、ということですね。

(A) そうですとも。それでこっちのマチが、彼女が恐れていたことは、相手側のマチの「術」の方が彼女の「術」よりも強くて、それで自分が(足跡を)取り戻すことができないかもしれないということでした、その…。

(筆) つまり善と悪の競争のようなものですね、言ってみれば。

(A) そうです。

(筆) つまり、二人のマチの間での競争、ということですね。

(A) 二人のマチの間の競争です。

(筆) 善を行うだけでなく邪術もやるようなマチがいるということですね。

(A) 邪術もやるんです。邪術専門のものも多いんですよ。(中略)

(8) F氏の症状<3>

(筆) で、それではこの、あなたのご主人に関するより直接的な経験をなさった後で、例え

ば、マチに関するあなたの意見は変わりましたか。

(B) 変わりました。

(筆) 以前はどんな意見…、どのように思われていて、それでその後、今ではどんな風に思われますか。

(B) いえね、今は完全に回復していますからね。何しろ前はこの人ったら働くことすらままならなかったんだから。この人が働きに出るでしょ、というのはあそこの上手の方にある会社で働いていたんです。上司の人たちが夜中の1時頃にこの人を連れて来るんですよ。というのは、まず病院に連れて行くんだけど、何も異常が見つからなくてね。それで結局、この家までこの人を連れて来るんです。で、この人ったらベッドに直行して横になり、そこで体を丸くしていたんです。で、私がちょっと外に出ると、この人はそこにいるのが怖いって言うんですよ。それで私はこの人のすぐ横についていなければなりませんでした。

(筆) ああ、そうなんですか。怖かったんですか。

(A) ああ、何ともいえない恐怖がね。で、一度眠っても、ベッドの上でこんな風にものごく体が跳ねてしまうんです。こんな風に、とても高く跳ねてしまうんだ。

(筆) でもあなたは何故怖いのかわからなかったわけですね。

(A) ああ。突然恐怖心が襲って来て、ひどく体が跳ねるんだよ。

(9) 夫を説得したイタリア系3世の妻

(B) で、言い出しっぺは私なんです。というのは、私たちが育ったのは、周りがみんなマプーチェというところでした。ここのチャンコの地ですよ。それで、生まれてからこのかた、私たちの家の畑で働いていたのはマプーチェばかりだったんです。それで彼らは、あらゆる邪術に関する事柄とかいろんなことをよく話していました。

(筆) ああ、ああ、ああ。あなたはフンド(大土地)に住んでいたんですか。

(B) いいえ、父のほんのこれ位のバルセラ(小区画地)にですけど。

(筆) バルセラですか、ああ、ああ、ああ、ああ、お父さんのね。

(B) ええ、でそこでそういうことを話していました。でもね、私たちはずっとマプーチェたちに囲まれて生きてきましたけどね、でも決してその手の病氣にかかったことなんかなかったんですよ、あなた。決して、一度たりともね。

(筆) でも、そうした事に関する情報はお持ちだったと。

(B) もちろん。彼らはそういうこと、どうやってやるのか話していましたからね。

(筆) ああ、やり方ですか。ああ、ほう、ほう。

(B) そうですとも。例えば、「誰それが病気で、こんな事をされて、だからこんな症状に苦しんでいて、こんな風になっている」とね。だから私たちは、それで私はこの人がそんな事になった時、私が彼に言ったんですよ。

でもこの人は言ったんです。「そんなバカな、そんな事あるもんか。」ってね。

(筆) あなたが言っても。ああ、信じなかったと。

(A) ええ、信じてはいませんでした。

(B) この人は私の言うことを信じませんでした。それでこの人のお父さんに言ったんです。その頃はまだ生きていて、お舅さんは存命中だったのですね。

でもこう言うんです、「いいや、お前。そんな事はありはしないよ。もう邪術なんて存

在しないんだからな。」とね。でも、私はお舅さんにこう言ってやったんです、「いいえ、ドン・ペドロ。確かにあるのよ。まだそうした類の連中は残っているわ。それで、永遠にいなくなりはいないでしょうよ。」ってね。でも「わかった、わかったよ。」って。それでも、というのは専門のお医者さんに診てもらったりあらゆる手を尽くしたんです。医学上の検査をしたり、あらゆる事をね。でも何にも解決法を見いだせなかった、だって症状は全く変わらなかったんですもの。

それでも私たちは決心したの。私は彼に言ったんです、「こうなったらね、どっちみちお金を払うのは私たちなんだから。行きましょう。」って。で、ある日出かけたんです。それで、あそこで原因を告げられて、帰って来たときには、もうこの人の症状は少し軽くなっていたんです。というのは、その日のうちに薬草液を入れた瓶を二本渡されましたから。

(筆) ほう、ほう、ほう。

(A) すぐに薬草を処方してくれたんだよ。

(B) 瓶二本分の薬草汁を渡してくれたんです。それからまた薬をもらいに行かなきゃならなかったわよね。というのはマチトゥキ儀礼は一ヶ月後ということになったのね。

(A) 大体一ヶ月後だね。

(B) その間、そうした薬草汁を飲まなければならなくて、その後でマチトゥキをやるということだったのよ。

(筆) ああ、なるほど。

(B) 病気の素を動かしておくためにね。で、それからその後でマチトゥキをやるわけなのよ。で、そうしたんだけど、でも今の今まで本当によかったと私は思っているわ。だってこの人の病気が治ったもの、回復したもの。

(筆) ああ、ということは、あなたたちはただマチトゥン儀礼をやった事のみが彼を回復させたと確信しているんですね。

(B) そうですとも。わたしたちは、私はそう思ってる。少なくとも私はそう思っているわ。

(A) 俺もだよ、だって…。で、その後でもう、メディカ(マチ)は俺にこう言うんだ、「これによしと。わたしが尽くさなければならぬ手は全て尽くしました。今度はお医者さんに診てもらわなければなりませんよ。」ってね。で、また医者のところへ行ったんだ。そこで見つかったのは、神経系の問題ということだったんだよ。

(筆) ああ。

(A) で、それだけだったんだよ。で、それで神経用の薬を処方されて、で…。

(筆) でも医者たちは相変わらず、つまりそういうことは知らずじまいということですね。

(A) もちろんだよ。ああ、医者たちはそういうことについては、何ら、全く…。そんな次第で事は解決ってわけさ。

(10) 実体験ゆえの確信

(筆) で、他の家族の人たちは、例えばあなたがこの体験に関するお話をされると信じてくれますか。

(A) ええ、ええ、信じてくれますよ。

(筆) だって、あなたが実際に生きた経験ですものね。

(A) その通り、実体験ですよ。私はそれを自分自身で体験したんだから。私はそのこと

話すんですよ、あのね、今では実体験を交えてね。それに私はそのことを自分自身の肌で感じたんだから。

5. 注

1. チリ最大の先住民族マプーチェ民族の土地闘争とその背景については, Bengoa [1999], 千葉 [2000]参照。また, ペウエンチェ民族の生活圏を侵犯するダム建設の問題については, Bengoa [1992], Morales y otros [1998], Namuncura [1999] 参照。
2. マチによる白人患者治療については, 千葉(a): 166-182, 千葉(b): 242-244. 参照。
3. 植民地時代に関する研究の中には, 異端審問の記録などから白人系住民と先住民シャーマンとの交流を示唆する事例を引用しているものがある。(Dougnaç [1981], Montecino [1994]: 10-11.) それに対し, 現在のマプーチェ文化を扱った研究にはこうした側面に光を当てたものは少ない。唯一の例外として, マプーチェ社会における邪術の問題を, 社会構造の点から機能論的に説明したファロンの研究 (Faron [1964], [1986]) が挙げられる。これらの研究の中でファロンは, 白人系住民が行う邪術に対するマプーチェたちの警戒心に言及している。(Faron [1964]: 167, 169, Faron [1986]: 88.) ただこの場合問題にされているのは, 「非先住民ウインカがマプーチェに対して(潜在的に)行いうる邪術行為」であり, 邪術のテーマが「ウインカ対マプーチェ」という民族対立の視点で認識されている。その意味で, 本稿の証言が示唆する状況とは根本的に異なった認識に立っているといえる。
4. Oyarce [1988], Foerster [1993], Durán y otros [1997], Montecino [1995]: 41-51. 等参照。
5. Ester-Greve [1971]: 16, Montecino [1982]: 24-25. 参照。
6. 例えば, チリ人文化人類学者クリスティアン・パーカーは, 第8地域の民間医療の実態に関する研究の中で, 文脈から白人系患者と推定される女性のマチによる治療に関する簡素な体験証言を引用 (Parker [1992]: 72-74)しているが, この点を特筆してはいない。
7. 「(一部の)マチによる邪術の実践」の問題も, これまで十分に検討されてこなかったテーマの一つである。ルマコ区在住のある女性マチによる, 「邪術マチ」に関する証言としては, 千葉(b): 253-254. 参照。
8. 平定 *Pacificación* 「平定」については, 千葉[1999], 千葉[2001(予定)]参照。
9. この証言を行った夫婦が住むルマコ区にも, 1904~1905年にかけてイタリア人の植民村が建設されている。患者の妻もこの時に移民したイタリア人の子孫である。ルマコ区におけるイタリア人植民の過程については, Contreras y Venturelli[1988]参照。
10. マチトゥキ *machituqui* マチが行う治療儀礼を意味するマプーチェ語の名詞「マチトゥン *machitun*」の語根“*machitu-*”にスペイン風の語尾(-*que*)を付けて造った名詞「マチトゥケ *machituque*」の異形。

11. 今世紀の前半(1930年)に初版されたマプーチェ語による証言集の中で、太平洋岸のプデ
イ地区に住むあるマチの兄(弟)が「マプーチェ同士」の邪術行為について説明している。
その説明の中でも、邪術テクニックの一つとして「足跡(pünon)」の利用が指摘されている。
(Coña[1984]: 369.)また、現在ルマコに住むあるマチも、邪術を実行する方法の一つとし
て「足跡」の利用に言及している。(千葉(b): 244.)
12. テムコ区は第9地域の丁都にあたり、近代的な設備を備えた多くの大病院が立ち並んでいる。
13. トライゲルマコ区に東接するトライゲン区には、小規模な病院が一つだけ置かれている。
それに対し、ルマコ区には診療所があるだけで、病院は存在しない。
14. メディカ médica 本来の意味は、「女医」を表すスペイン語の名詞だが、民衆層の間では
しばしば「女性民間医療師」という意味で使われる。ただ、語り手Aは、この名称がそうし
た意味でマチを指すことを前提とした上で、ここでは同じ名詞を「邪術師」の意味で用いら
れている。これは彼の認識の中で、邪術を治療する能力を持つ人物と、邪術を実行する人
物が同じカテゴリーに属していることを意味している。注16参照。
15. チレーナ chilena この名詞の原義は「チリ人女性」である。だがマプーチェたちは、よそ
者である非先住民系、すなわち白人系の女性を指す名称の一つとしてこの言葉を使うよう
になった。今日では、この地域に居住する白人系住民の間でもこの言葉が同義の民族名称
として用いられるようになった。差別的な含蓄はない。
16. メディカ こちらの方は「治療師」としてのマチを指している。
17. 8年前の「5万ペソ」は、1991年1月1日当時のドル、円に換算すると、それぞれ87,87ドル、お
よび12,254円に当たる。一方この額は、同年の国民一人当たりの総収入月平均216,75ドル
の約40.5%に相当する。
18. 「病院で治せるタイプの疾病」と「病院では治せない疾病」という二分法は、現代のマプー
チェたちの疾病認識にも共通する特徴である。Ester-Greve [1971]: 13, Montecino [1985]:
25, 千葉[1998]: 154-166.
19. 目を覆う治療儀礼を行う際、マチには特定の神格が憑依し、この神格が全ての施術を執り
行う。ゆえに、この神格が霊的な目を通して一部始終を見ているので、マチの「肉体的な目」
は必要ではなくなるため、このように目を布で覆うというマチが少なくない。
20. クルトウルン kultrun マチの儀礼行為には欠かせない片面太鼓。木の幹を半円系にくり
ぬき、開かれた口の部分に馬や牛の皮を張って作る。皮には黒色や赤色でマプーチェの
世界観を表す図が描かれる。
21. マチョ macho スペイン語の原義は「男らしい男」を意味する名詞。この場合は女性であ
る「マチmachi」が神格の憑依を受けた際、これに話しかける「通訳の男性」という独特の
意味で使われている。このマチの場合は夫がマチョを務めていた。

22. チリ語 *chileno* チリの公用語はもちろんスペイン語だが、一般のチリ人が用いる口語的スペイン語は、子音の極端な省略傾向や独特な形態の二人称単数系など極めて個性の強いものとなっている。そうした理由から、チリの人々は「チリ独特の言語」という意味を込めて、これを「チリ語」と表現することが少なくない。
23. 尿診断現代のマチが患者の病因を診断する方法のうち、最も一般的なのは「尿」を使う方法である。これは、患者の尿を入れたガラス瓶を朝日(東方向)の光にかざし、その状態によって病因を判定するというものである。(千葉(b): 249-250.参照。)
24. ダブル・マチトゥン *machitun doble* 特に強力な邪術に冒された患者に対して行われる治療儀礼で、通常のマチトゥン(治療儀礼)の二倍の人員を必要とする。(千葉(a): 187.参照。)

6. 参考資料

(1) 音声資料(MD録音)

A y B, *Testimonio*, Comuna de Lumaco, 11 de agosto de 1999.

(2) 文献資料

Bengoa, José, *QUINQUÉN: 100 Años de Historia Pehuenche*, Ediciones Chile América CESOC, Santiago de Chile, 1992.

Bengoa, José, *Historia de un conflicto: El estado y los mapuches en el siglo XX*, Editorial PLANETA, Santiago de Chile, 1998.

千葉泉, 「マチと夢と銀細工—チリ先住民伝統医療師の現状—」, 『大阪外国語大学論集』第17号所載, 203-230頁, 1997年。

千葉泉(a), 『馬に乗ったマプーチェの神々—チリ先住民文化の変遷—』, 大阪外国語大学学術研究双書19号, 1998年。

千葉泉(b), 「「マチ」の証言: ルマコ区(1)—エウダリア・ライマンの場合—」, 『大阪外国語大学論集』第19号所載, 1998年, 233-259頁。

千葉泉, 「マプーチェ歴史伝承チオルチオル地区(1)—ロサ・バーラ・カユルの語る「平定」—」, 『大阪外国語大学論集』, 第21号所載, 1999年, 193-215頁。

千葉泉, 「マプーチェ歴史伝承 マプーチェ歴史伝承: トライゲン区(1)—ホセ・カディン・ピチュンが語る「平定」と土地闘争—」, 『大阪外国語大学論集』第22号所載, 2000年, 41-66頁。

Contreras Batarce, Juan y Venturelli Abad, Gino, *NUEVA ITALIA: UN ENSAYO DE COLONIZACIÓN ITALIANA EN LA ARAUCANÍA*, 1903-1906, Ediciones Universidad de la Frontera, Temuco, 1988.

Coña, Pascual, *Testimonio de un cacique mapuche*, Pehuén, Santiago de Chile, 3ra edición,

1984.

Dougnac, Antonio, "El delito de hechicería en Chile indiano", en *Revista Chilena de Historia del Derecho*, No. 8, Santiago de Chile, 1981.

Durán, Teresa y otros, *Conocimientos y Vivencias de dos familias Wenteché sobre medicina Mapuche; Mapuche Lawentuwün Epu Reyñma Wenteché ñi Kimün Meu*, Universidad Católica de Temuco, Temuco, 1997.

Ester-Greve, María, Fernández, Joaquín y Piedler, Carlos, "Mitos, creencias y concepto de enfermedad en la cultura mapuche, en *Actas Psiquiátrica y Psicológica para América Latina*, XVII, 3, Buenos Aires, 1971, pp.180-193.

Faron, Louis C., *Hawks of the sun, Mapuche morality and Its Ritual Attributes*, Pittsburgh, University of Pittsburgh Press, 1964.

Faron, Louis C., *The Mapuche Indians of Chile*, Waveland Press, Illinois, 1986.

Foerster, Rolf, *Introducción a la religiosidad mapuche*, Editorial Universitaria, Santiago de Chile, 1993.

Montecino Sonia, *Ritos de vida y muerte: brujas y hechiceras*, SERNAM, Santiago de Chile, 1994.

Montecino Sonia, *Sol Viejo, Sol Vieja; Lo femenino en las representaciones mapuche*, SERNAM, Santiago de Chile, 1995.

Montecino, Sonia y Conejeros, Ana, *Mujeres Mapuches, el saber tradicional en la curación de enfermedades comunes*, Santiago, Ediciones CEM, 1985.

Morales U., Roberto y otros, *Modernidad o etnocidio en territorio mapuche*, Instituto de Estudios Indígenas, Universidad de la Frontera, Temuco, 1998.

Namuncura, Domingo, *Ralco: ¿represa o pobreza?*, Editorial LOM, Santiago de Chile, 1999.

Oyarce, Ana María, "Sistemas médicas que coexisten en la IX Región de Chile: una descripción general", en *Enfoques en atención primaria* #3, año 3, Santiago de Chile, 1988.